

地域住民の居場所における「薬育」動画の効果検証 —薬学生による「薬育」を通じた地域連携—

原田 美那 ● 帝京平成大学 薬学部



「薬育」動画の放映と合わせて健康測定会を行っている様子

要旨

本研究では、地域住民の居場所であるスターバックスコーヒーにおいて、2分30秒のテロップ付き「薬育」動画を放映し、医薬品の適正使用に関する知識や意識に与える影響を検討した。分析の結果、動画視聴後に医薬品に対する知識や意識の向上が確認された。さらに、受診や服薬の有無にかかわらず「薬育」動画への一定の視聴ニーズが見られた。特に女性や学生では、動画視聴や健康情報の享受に対する意欲が高く、薬学生や薬剤師による日常空間における健康情報提供の新たな可能性が示された。

地域医療貢献のポイント

医療機関にアクセスしにくい地域住民に対しても、日常生活の場を活用した健康教育を展開することで、セルフケア意識やヘルスリテラシーの向上に寄与する可能性が示された。

1. 目的と方法

少子高齢化が進む日本において、薬剤師は疾病予防や啓発活動などの健康サポートを積極的に担うことが求められている。薬剤師を養成する薬学教育においても、保健知識の普及指導・啓発活動を実践する力が重視されている。本学では2018年度より、薬学生による「薬育」活動を開始し、小中学校や高齢者施設における教育活動を展開してきた。2023年度は、薬学部2年生のセミナー科目において学生が作成した「薬育」プログラムを動画化し、地域住民が日常的に利用するスターバックスコーヒー中野セントラルパーク店で放映した。本研究では、「薬育」動画の視聴が、地域住民の医薬品の適正使用に関する知識や意識にどのような影響を与えるかを検討する。

薬学部2年生が作成した「薬育」プログラムをもとに、2分30秒のテロップ付き動画を制作し、スターバックスコーヒー中野セントラルパーク店(以下、スタバ)の壁面モニターでの放映およびQRコード経由による個人端末での視聴を行った。動画では、医薬品の種類や薬物動態、主作用と副作用、オーバードーズの危険性、違法薬物の実態などを紹介し、正しい使い方と薬剤師への相談の重要性を伝えた。視聴者(n=66)を対象にアンケート調査を実施し、視聴前後の知識や意識の変化をウィルコクソンの符号付順位検定で分析したほか、「薬育」動画の視聴希望や健康情報の享受意欲について、受診・服薬の有無との関連をカイ二乗検定およびロジスティック回帰分析により検討した。

2.現状の成果・考察

「薬育」動画視聴前後の比較により、医薬品に対する知識や意識が向上する傾向がみられた。特に「添付文書を読む」「規則正しい生活を心がける」「薬剤師に相談する」など、日常的な行動に直結する項目において、視聴前後で統計的に有意な意識の変化 ($p < 0.05$) が確認され、「薬育」動画が具体的な健康行動への意識向上につながった可能性が示唆された。

また、「薬育」動画の視聴希望およびスタバでの健康情報提供に対する関心について、受診や服薬の有無との関連を検討した結果、いずれの項目においても統計的に有意な差は見られなかった ($p > 0.05$)。このことから、医療機関との接点がない人々においても健康情報へのニーズが存在することが明らかとなった。

さらに、「今回見たような『薬育』動画を今後どの程度見たいか」「スタバで健康に関する情報を得ることにどの程度興味があるか」といった質問に対しては、女性や学生層を中心に関心が高い傾向が確認された。これらの結果から、医療機関との接点の有無にかかわらず、日常空間における健康情報提供は多様な層に有効であることが示唆された。

一方で、スタバに癒しや非日常性を求める来店者からは、情報提供を望まないという声がある可能性も考慮すべきではあるが、多く

の来店者が動画視聴を肯定的に受け止めており、生活空間での自然な健康啓発のあり方として、「薬育」動画は有効なアプローチとなり得ることが確認された。

3.今後の展望

今後は、医療機関に通っていない層や若年層を含めた地域住民に対しても、情報提供を継続的に行っていくことが重要であると考えられる。薬剤師や薬学生が地域の生活空間において健康教育の担い手となることで、医療機関にアクセスしにくい住民に対しても、日常生活の場を活用した健康教育が展開され、セルフケア意識やヘルスリテラシーの向上に寄与する可能性がある。本研究の成果は、今後の学会発表を通じて広く共有し、地域における薬育活動の実践モデルとして発展させていく予定である。

「薬育」動画の様子

